



Title	Willa Cather についての一考察（二） Antonia Shimerda と Jim Burden について
Author(s)	藤井, 昌子
Citation	人文科学研究報告, 6, pp.77-87; 1956
Issue Date	1956-03-22
URL	http://hdl.handle.net/10069/31890
Right	

This document is downloaded at: 2018-11-18T04:21:21Z

Willa Cather についての一考察 (二)

—Antonia Shimerda と Jim Burden について—

藤 井 昌 子

Willa Cather には、その生涯に亘つて影響を受けた強力な二人の指導者がある。即、彼女は、H. James を読み、小説の構造に関する限りない興味を唆られるとともに、視点の人物の使用の妙味を悟り、対話の巧みな運ばせ方を会得する等、実に多くのものを学び取つた。更に又、Sarah Orne Jewett によつて、「土に帰る」ことの重大さを教えられ、その地域性⁽¹⁾において成功への基礎を築いたのであつた。My Ántonia は、彼等の理論が、Cather の中で如何に理解され、発展したかを物語る作品でもあつた。

My Ántonia は O Pioneers とともに、草原を背景として描かれた偉大な小説の一つであるが、Cather はこの中で、文学における主要なテーマと考えたものを、より深く掘り下げて行つた。そのオ一のテーマは、O Pioneers と同じく土地の持つ冷酷さであつた。この土地の冷酷さは、初期開拓の移住者達に、成功よりもより多くの失望と災害をもたらし、人間の性格に与えたその試練は特に酷しかつた。唯、最も逞しく力ある者だけが成功して行つた。けれども、My Ántonia における土地の酷しさは、O Pioneers の荒涼たる自然と比べれば、やや和らげられ、矯められた感がある。既に多少は人手が加わり、強固な意志さえあれば、何とかやつて行けそうにも見える。附近には、既に或程度自然の猛威を後退させて、より快適な生活を営み、新しい移民達に対しても、進んで何かと援助の手を惜しまぬ人達もないではなかつた。即、Jim Burden の祖父母達は、この移民達を土地の酷しさから保護する防風林的存在でもあつた。従つて My Ántonia における土地は、O Pioneers のそれよりは、もつと希望あるものとして描かれている。前稿に引いた Hanover⁽²⁾ の描写と My Ántonia における自然とを比べることによつて明らかだと思ふ。Shimerda 一家が新しく移り住んだところは、Black Hawk から更に20哩も離れた農場地であつたが、所々散在する玉蜀黍畑以外には、

As I looked about me I felt that the grass was the country, as the water is the sea. The red of the grass made all the great prairie the colour of wine-stains, or of certain seaweeds when they are first washed up. And there was so much motion in it; the whole country seemed, somehow, to be running.⁽³⁾

と言つた状態であり、その隣家を訪ねるのにも、

I could hardly wait to see what lay beyond that cornfield but there was only red grass like ours, and nothing else, though from the high wagon-seat one could look off a long way. The road ran about like a wild thing, avoiding the deep draws, crossing them where they were wide and shallow. And all along it, wherever it looped or ran, the sunflowers grew; some of them were as big as little trees with great rough leaves and many branches which they bore dozens of blossoms. They made a gold ribbon across the prairie.⁽⁴⁾

といった経験は避けられなかつた。冬ともなれば、降り積つた雪のために、邸内の雞舎にも、半日がかりで雪のトンネルを掘りあげ、辛うじて連絡を保つといった有様であつた。並々の人間の手ではどうにもならない草原の持つ野生と抵抗とをその儘表わしている自然であつた。とは言ふものの、Hanoverの灰色のそれに比べれば、遙かに明るく、希望の色がそこはかたなく流れている。黒ずんだ赤茶色の草原の中に、鮮かな色どりを添えているひまわりは、その昔、先達者達の道しるべとして希望の象徴と考えられたというが、何か明日への希望を思わせる。Alexandraの直面した自然は、道なき道を分け入るにも似た抵抗を感じさせたが、Antoniaのそれは、さだかではないにしても、既に先達が通つた後を進むにも似た気安さを持つている。即、僅かながらも、既に人力により和らげられた自然であつた。

ここにおいても「力」は、矢張り、女性であるAntoniaによつて表現され、彼女は、自然と社会が与えた不幸と苦しみを、遅く堪え忍んで行つた。酷しい運命を戦い抜くその男らしさは、Alexandraのそれと同種のものであつた。そして又彼女は、

I belong on a farm. I'm never lonesome here like used to be in town. You remember what sad spells I used to have, when I didn't know what has the matter with me? I've never had them out here. And I don't mind work a bit, if I don't have to put up with sadness.⁽⁵⁾

と自ら言つているように、土地と一体であることを自覚する女性であり、自然と土地の産み出す物一切を、丸で我が子のように愛撫し、且その感情を分つことができる女性でもあつた。

... Antonia kept stopping to tell me about one tree and another. 'I love them as if they were people,'..... 'There wasn't a tree here when we first came. We planted every one, and used to carry water for them, too—after we'd been working in the field all day. Anton, he was a city man, and he used to get discouraged. But I couldn't feel so tired that I wouldn't fret about these trees when there was a dry time. They were on my mind like children. Many a night after he was asleep I've got up and come out and carried water to the

poor thing.....⁽⁶⁾

T. K. Whippleが言うように、主人公 *Ántonia* も、*Alexandra* と同じく、‘単純で原始的な男々しい女性⁽⁷⁾’には違いないにしても、‘冷酷な調子を持つ程に’逞しくは描かれていない。*Alexandra* の持つ近付き難いまでに毅然たる逞しさは、この *Ántonia* には見出されない。既にその背景が暗示するように、*Ántonia* も開拓の時代を背負うに適した資質を充分備えているが、もつとまろやかな、ふくらみのある、しかも土の香を豊に漂わせているより近づき易い女性である。目に見えない程ではあるが、徐々に変形しつつある開拓の社会において、*Alexandra* と同種ではあるが、その発展の姿において捕えたのが *Ántonia* なのである。‘作中の人物やその性質について言えば、その立場における反応の仕方こそ大切であつて、人物の説明にならない事件は考えられない⁽⁸⁾’とした James の主張が、*Cather* に深い感銘を与え、よく理解されたことは、*Alexandra* から *Ántonia* への人物の発展の過程においても明かである。

人生の戦いにおいて、最後の勝利は同じく女性の手に限られているのも、興味ある事柄ではあるが、女主人公の土との戦い、人生との闘争において、夫々にその意味を読みとり、結果を解釈する役割が、男性である Jim Burdon によつて果されていることは極めて興味深い。Jim が視点の人物であることは、いうまでもなく H. James の小説技巧を理解し、巧みに実践したことを表すものであるが、この人物の性格と、色々な立場における反応の仕方を検討する時、単に視点としての意味を持つばかりでなく、*Cather* の文学の発展方向を予言するものとして考えられる。

「My *Ántonia* は、正しくは小説とは言い切れない」という不満を含むある批評に対しては、*Cather* は屢々平静ではいられなかつた。何とならば、*Cather* は、一見奇妙とも思われ、又、無くもがなと考えられる序文の中で、この物語の性格と形式とを、Jim に、明かに予告させているからである。*Cather* は何が故に、自分自身で *Ántonia* の生涯を語ろうとはせず、Jim を仲立としてこの物語を進めて行かねばならなかつたのであろうか。初版以来、この序文に満足せず、あれこれ推稿の結果、1926年、遂にこれを書き換えているのを見ても、*Cather* は Jim を重要視し、この人物の醸し出す効果に、深い期待を寄せていたのに違いないと思われる。

Chicago の西に向う列車の中から、この序文が始まるのは、初版も改訂版も変りはない。前者では、幼友達で、現在西部鉄道の法律顧問である Jim Burden と、作者は、偶然同じ車に乗り合せ、懐しい思出話を始めるのである。二人は同じニューヨークに住んではいるが、Mrs. Burden の人柄故に、お互に余儀なく疎遠にしているという間柄である。Mrs. Burden は汽車に同乗こそしていないが、一頁余りがこの人のためにさかされている。Mrs. Burden は軽薄で、気儘で、落付かない人柄、その上自分の財産を持ち、勝手気儘な生活を送っている。従つて Jim Burden の家庭生活は孤独な、恵まれぬ毎日で終始していた。

Jim の性格は、彼の結婚生活の失敗にもかかわらず、損われることもなしに、少年の頃と同じく浪漫的であり、今なお西部に対する限りなき愛情を持続している。話はたまたま、お互に昔からよく知っており、心から親しみ、しかも感歎を惜しまなかつた Bohemian の少女 *Ántonia* の上に及んで行つたのである。この少女は二人にとっては、彼等の郷土を意味するものであり、少年少女時代の全生活、全冒険を象徴するものでもあつた。作者は *Ántonia* の思出を語るには、Jim が最も適していると考えたが、兎も角二人で *Ántonia* の追想を書き合つてみることにした。次の冬、Jim は約束を守り、書きあげた原稿を持つて訪ねて来た。その時、作者はほんの二三の覚書を書き付けていたに過ぎなかつた。Jim は「単に事実と印象を記録したのであり、内容を変える事は勿論、整えることさえしなかつた。*Ántonia* の名前が思い起させたことを、唯そのままに書き記して行つたに過ぎない。」と説明している。即、形もなければ、題名さえも付けてはないというのである。最後に、表紙に唯一語、*Ántonia* と書付けたが、更にもう一つ附加えて *My Ántonia* としたのであつた。作者はこの手記に心から魅了され、そのままに書写したのだということになつている。

1926年に書改められた結果、この Jim と作者が話合の上で思出を書綴るという項目が除外され、Jim は Cather に会う前から、その思出を書いていたことになつている。更に又、Mrs. Burden に関する説明の部分は Jim の結婚の失敗を暗示する程度に止め、殆どこれを削除している。然し、最も重要だと思われる部分、即、職業的作家によつて書かれたものではなく、郷里の West を離れてはいるが、なおもその地に強い愛着を持続け、現在の自己の生活には心満されぬものを感じつつ、本意なき日々を過ごしている孤独な人によつて、又 *Ántonia* の生きた時代こそ最高のものであつたと信ずる人によつて書かれたという箇所は、そのままに残されている。

以上のように、書き改められたり、省略されたりしたことは、作品全体から見て、確によりよい効果をあげている。それに就いて E. K. Brown は

Jim's concern with *Ántonia* seems more profound when the decision to record his memories stems not from a meeting with a professional writer but from his own inward impulse.⁽⁹⁾

と言つているが正にその通りである。又 Mrs. Burden に就いての 'satirical account' が取り除かれたことも、こうした婦人になおも依存しなければならぬ Jim の性格に関して読者の無用な危惧の念を抑え、作中の女性に関する Jim の判断の妥当性についての不信、疑惑を逸散させることに役立つている。この結果から、Cather が Jim を非常に大切な人物と考え、その効果を強調するのに努力したことが察しられる。ではどうして Cather はそれほどに Jim を大切に考えたのであろうか。

My *Ántonia* を一読したものは、Jim にとって一人の女性が、これ程に大切なものであるならば、何故に、彼は恋愛関係に入り得なかつたのであろうか、と不思議に思うに相違ない。Jim は、始から *Ántonia* に深い好奇心を抱いていたが、年が進むにつれて、その人成に次第に魅了されて行つたにもかかわらず、何故に、それによつて幸福を築こうと努力しなかつたのであろうか。後年、当時悲境にあつた *Ántonia* を訪ねた際にも

... Do you know, *Ántonia*, since I've been away, I think of you more often than of anyone else in this part of the world. I'd have liked to have you for a sweet heart, or a wife, or my mother or my sister—anything that a woman can be to a man. The idea of you is a part of my mind;⁽¹⁰⁾

と言うだけで、自らの微温的態度を悔いることもなしに淡々と農場を去つている。又 *Ántonia* との関係で、最も中心と思われる部分においてすら、期待される感情の盛り上がりがなく、不思議な空虚さがある。これは作者が、Jim を単なる語り手としてばかりでなく、それとは両立でき難い役割を果させようとしたからではないのであろうか。

Cather は何故、Jim を語り手として選ばねばならなかつたのであろうか。ここにおいて、私共は作者の作品の特徴を思い浮べてみる必要がある。Cather の作品において一特に初期の三部作においてそうであるが一、俗にいう男性の本質と女性の特質が、寧ろ逆に仿っているのは興味深い。即、堪え忍んで行くのは常に女性であり、その結果を解釈し、意味付けて行くのは、概して男性の仕事となつている。前述のように土地の持つ厳しい要求に応え得る者は、単純であり、原始的で、遅しく、おおしい女性' であるのに対し、男性は屢々、それに対応する力を与えられてはいないし、又時には、それに共感を持ち得ないような感じ易い、脆い魂の持主であることもある。*Ántonia* の父親の Mr. Shimerda や Carl Linstram 等がそれである。彼等は皆、極めて繊細な人生観の持主であつた。こうした種類の人達は、何らかの形において、その環境から自ら脱出するか、屈服して犠牲となるか、どちらかを選ばねばならなかつた。*Ántonia* の持つ素朴な力や、ひたむきな生命の営みは、Jim に語られることによつて、始めて、真の「美」の要素を与えられるのであり、Jim の男性としての絶大な愛と讃美があつて、始めてふくらみある美しい姿として現出されるのであつた。その愛憐の情を通してこそ、かくまでに高雅に歌い上げられるのであり、又あの純粋な調子が保たれ得たのである。一方、Jim 自身も、その愛故に又、その讃美故に、酷しい土地の価値を認識し、これに限りない愛着を持つ事となり、やがては、その尊い意味を自ら悟るに至るのである。以上のような役割を果すために、語り手は先ず男性でなければならなかつた。

男性である Jim がこの物語の語り手として選ばれたことの中に、Jim と *Ántonia* は全く異質の性格と運命とを背負つて行くべき必然性が含まれていることを見逃してはならない。即、Cather の初期小説に一貫している才二のテーマ、創造的芸術家とは、完全な生活と考へ

られるものに最も親密な共感を持つものである、という思想の片鱗が、Jimの人物を通して感得される。更に又、開拓者達の共同生活が芸術家を理解することができないと同じく、田舎町の生活は、開拓者の持つ力を、たとえ女性の力と雖も拒否するものだという思想の暗示が、JimとÁntoniaの動きの中に見ることができる。

Jim Burdenはこの作品の中で、芸術家或はそれに類する者の持つ繊細な感受性を与えられている。Mr. Shimerdaは、純粹に芸術家として表現されているが、JimはこのShimerda氏の寂しさや、悲しみを深く理解することができるし、又心からの同情を惜しまない。Shimerda氏もJimには特別な親愛の情を示しており、両者を結び付ける強い共感があつたことが察しられる。Jimが卒業式当日に行つた感激の演説のあと、ÁntoniaとJimとの間に、次のような言葉が交される。

‘Oh, I just sat there and wished my papa could hear you! Jim—there was something in your speech that made me think so about my papa!’

‘I thought about your papa when I wrote my speech, Tony, I dedicated it to him.’⁽¹¹⁾

Ántoniaにとつても、Jimの人柄は、何か父親に似寄つたものとして映るのであつた。更に又、Ántoniaの生命力と逞しさの背後に、人間性の「あわれ」の意味を読みとる感受性と、その洞察力は、確に、Jimが芸術家としての十二分な素質を備えていた事を証明するものでもある。

開拓者の共同社会は、その低い文化故に、繊細な感受性を持つ人々を理解し受入れることができない。又そこに住む人達は自分自身、機会を掴んで飛躍のできる人達でもなく、Alexandraの弟達や、Ántoniaの兄、Ambroschの如く、目先の物的欲望に心を燃やし、芸術家やそれに類する人々を理解できないばかりでなく、軽蔑せざるを得ないのであつた。Ambroschは父Shimerda氏を軽蔑し、無視して、母や妹達に独裁権を振うといつた有様であつたが、Shimerda氏にはこうした環境においては、孤独にして無力な自分を支える力はなく、自ら生命を断つ以外に道はなかつた。このShimerda氏と共感をつち合ふJimが、Ambroschやその母親から、白い目をもつて迎えられたのは当然であつた。Jimが農場を去るに当り、ÁntoniaやLena達に愛惜の念を感じつつも、深い感傷もなしに、この地を離れているのは不思議ではない。

一方、Ántoniaは、農場を離れて、Black Hawkという田舎町で働くことになつた。華やかな町の生活の一時的な幻惑は、Ántoniaを酷しい試練の場に転落させて了つたのである。やがて、自ら土に生きる人間であることを自覚し、それが彼女に眞の成功をもたらすことになるのであるが、町の生活は、彼女を傷付けることしかできなかつた。土に対しては、あれ程の力と逞しさを發揮し得る彼女も、町の中では簡単に非難的となつて行つた。Lenaとは全く対象的な立場であつた。町の生活で自分の人生を導き出すなどということは、到底できない人柄であつた。

Jim と Antonia が結ばれそうに見えて、最後まである距離を保ち続けて行くのは、相反する性格が導き出す必然の結果であるが、この構成の中に、草原文化に対する Cather の最も強い、又最も厳しい批判がある。即、草原文化は、芸術的魂を理解することができないし、一方そこに生れた田舎町は、開拓者の持つ力を、如何なる形においても、受入れることはできないという主張の萌芽がある。これは Cather が、自ら取上げた草原地方に対し、終生持続けた感情を示すものであり、その地方の持つ大きな情緒的魅力を自覚しつつも、その限度について、悲劇的な見透しを持つていたことがわかる。Cather は、ここでは、それを初期の形で受入れてはいるが、現代社会を拒否するに到る次の段階を示唆するものとして意味がある。

Jim が語り手として選ばれたこと自体に、Jim と Antonia は全く異質の性格と運命を背負う必然性のあつたことは前述の通りであるが、感受性豊かな Jim と、単純で原始的な逞しさを持つ Antonia とは所詮、同じ道を歩くことはできなかつたし、結び合わされる筈もなかつた。従つて作者は、Antonia に配するに、土地に関する無言の感応力を持ち、それにより、彼女を助けることのできる Cuzak なる人物を案出した。Jim を語り手として一貫させ、Antonia と結ばなかつたことは、Cather が、土地と人との関係において、徹底した理解を持ち、その本質をはつきりと把握したことを示している。前稿において、私は Alexandra と Carl との結婚について、些か述べるところがあつたが、これについて Hoffman⁽¹²⁾ は、Carl は草原を捨て、都会に去つて行つたけれど、Alexandra が、その目的の達成に成功した時に、再び、結婚のために彼が帰つて来るというこの物語の構成は、意味深いこととして認めているけれど、土地の冷酷さ、即、人間に絶えざる前進を要求する土地の厳しい性格と、Alexandra の土地への宿命的なまでに強い感応力とを考え合せる時、Alexandra が、結婚を契機として、永久に休息を楽しむとは考えられない。その休息が、一時的なものを暗示しているとすれば、Alexandra と Carl との結び付きに、ある種の不安を持たざるを得ない。些か、結末を安易に急いだ感が強い。この結論に対して、Cather も亦、不満を感じていたのに相違ない。従つて、Carl 的性格の Jim を、語り手として終始させ、Cuzak なる人物を配したのは、O Pioneers の結末に対する修正であり、又発展でもあると考えられる。又 Pioneers 的性格を持つ女性の幸福について、一つの限度を示すものでもある。Antonia と Cuzak の家庭生活について Jim が、

It did rather seem to me that Cuzak had been made the instrument of Antonia's special mission. This was a fine life, certainly, but it wasn't the kind of life he had wanted to live. I wondered whether the life that was right for one was ever right for two!⁽¹³⁾

と言つているのは、意味深長であり、将来に問題を残すものと思われる。

Jim の Antonia に対する反応の仕方は、又、今一つの主なテーマを、はつきりとさせてい

る。O Pioneers においては、アメリカの地の人々は全然活動しなかつた。Bohemians や Scandinavians がその主な人達であつた。The Song of the Lark では、アメリカの地の人々は、はじめの方では、かなり重要な役割を果しているが、それは個人としてであり、集団としては取扱われていない。ところが My Ántonia においては、Cather は古くからのアメリカの人々と、新しくヨーロッパから移住して来た人々との関係に深い関心を寄せている。読者は、絶えず、両者を比較検討することを余儀なくされ、その結果、否応なしに、移民達の優越性を認識させられる。アメリカの人々の中で、Jim の祖父母である Burden 氏夫妻は、勝れた品性と実行力の持主として尊敬されているが、これは既に、人生の半ばを過ぎた人々であり、いわば過去となりつつある人物である。現在を背負い、今を生きつつあると思われる Ántonia や Lena、その他、主な移民の娘達は、町の指導者達の子弟で、固苦しい因襲と、しきたりの中で育つた同年輩の者達の間で置かれる時、彼等の優越性がはつきりと認められるのであつた。Jim は、次のように、その実態を語っている。

The country girls were considered a menace to the social order. Their beauty shone out too boldly against a conventional background. But anxious mother need have felt no alarm. They mistook the mettle of their sons. The respect for respectability was stronger than any desire in Black Hawk youth.⁽¹⁴⁾

又別の所では、

Physically they were almost a race apart, and out-of-door work had given them a vigour which, when they got over their first shyness on coming to town, developed into a positive carriage and freedom of movement, and made them conspicuous among Black Hawk women.⁽¹⁵⁾

町の銀行家の息子、Sylvester Lovett は、Lena に心惹かれながらも、結婚相手には、自分よりも遙かに年上で、唯、金持であること以外に取り得のない未亡人を選んだ。Jim は Sylvester の劣性を憤慨し、非難し、軽蔑する。然し一体、Jim 自身の行動は、どうであつたのであろうか。彼は、Ántonia に対して、あれほどに傾倒していたにもかかわらず、進んで道を開こうとはしなかつた。又、Lena とも結婚の機会があつたのに、それを実現しようとする積極性もなく、唯、青春を共に楽しむ相手として利用したのに過ぎない。彼は、指導教官から、Lena について、一度注意を受けると、特別な悩みも、苦しみもなしに、あつさり身を引いて了う。そして、やがて自分も、理解のない、つまらないアメリカの婦人と結婚し、終生、不作を啣ちながら、孤独の日々を過ごしている。それは、彼が軽蔑した劣性を自ら表わす行動であり、Sylvester と全く同種のものではないのであろうか。そこには新しく移住して来た人々の積極性と優秀性、アメリカの地の人々が、これ等の人々に対して抱く根強い偏見と彼等の

持つ劣性の対比がある。この劣性と偏見こそは、新しい移民達との真の融合を阻むものであるとして、当時の社会問題の核心をついた作者の毅然たる気概を示しているものと思われる。

Title の My *Ántonia* の下に、副書された Virgil の言葉 ‘Optima dies prima fugit’ については、序文には何の説明もないが、Jim のもう一つの意味を表すものとして、心に留むべきものであらうと思われる。

E. K. Brownは、My *Ántonia* を評して

.... In My *Ántonia* there is no massive central trunk such as the development of Thea Kronborg, phase by phase, provided for The Song of the Lark. In My *Ántonia*, instead, there is a gallery of pictures. For a while, as happened to Brownell, the pictures seem to be hung in a casual and episodic fashion; before long they affect one as illuminating one another and contributing to a general tone. They have been painted and arranged so that one may apprehend the values in that old Nebraska world, gone forever before the book was written.⁽¹⁶⁾

と言っている。形なき形ともいうべき形式の中で、Nebraska の情緒的魅力が十二分にこの作品において描き出されているが、その序文では、Jim をして、思い出すまを、そのままに書記したと言わしめていることによつても、これは、作者の周到な構想の上に、細心の注意をもつて組立てられた物語であることがわかる。従つて、この作品は、Cather の技巧上の特徴、即、技巧なき技巧の一端をよく表わしたものと見るのであつたのである。

Brown の言うように、そこには、画廊において、順々に絵を眺める時のような雰囲気の流れているが、その個々の絵を鋳でとめ、一つ一つの絵をゆつくりと味うことができるようにするのが、又その時々感慨を静かに誘導することが Jim の役目なのである。平面的に描かれた像に、立体感と時限とを与えるものが彼である。私共が、その一枚々々の絵の前に立つて眺める時、それはすでに完全に描きあげられ、整備されたものである。従つて、その示す「時」は、常に「過去」である。然るに *Ántonia* は、その時々現在の、遅く生き抜いて行く人物である。従つて、彼女によつて表わされる時は常に「現在」である。「現在」と「過去」、それは、どうしても同時に同じ場所に共存することは許されない。若し、強いてその可能性を考えるならば、思い出という形においてのみ許されることなのである。*Ántonia* と Jim が結ばれ得ないという宿命は、Jim が語り手として選ばれた時、既に定められたものであつた。この書の最も深刻な叫びは、*Ántonia* のかくほどに素晴らしい生き方も、Jim 一代の間に、既に過去のものになりつつあることについてあげられたのであつた。時の推移のめまぐるしさに対する歎の叫びであつた。物語の終末において、Jim は *Ántonia* との最初の出会いの素晴らしい日を思い浮べる。

This was the road over which *Ántonia* and I came on that night when we

got off the train in Black Hawk and were bedded down in the straw, wondering children, being taken we knew not whither. I had only to close my eyes to hear the rumbling of the wagons in the dark, and to be again overcome by that obliterating strangeness. The feeling of that night were so near that I could reach out and touch them with my hand. I had the sense of coming home to myself, and of having found out what a little circle man's experience is. For *Ántonia* and for me, this had been the road of Destiny; had taken us to those early accidents of fortune which predetermined for us all that we can ever be. Now I understood that the same road was to bring us together again. whatever we had missed, we passed together the precious, the incommunicable past.⁽¹⁷⁾

Jim は、最初から一貫して、現在を共有することのできない宿命を背負っていた。Boston の下宿に、今を時めく洋裁師として活躍する Lena の訪問を受けた後で、*Ántonia* やその仲間達の思い出の糸を手繰る彼は、激しい懐旧の情に捕われながら、始めて詩の本髄を悟るのであつた。そして感慨をこめて、更にこうつぶやくのであつた。“It [his old dream] floated before me on the page like a picture, and underneath it stood the mournful line: ‘Optima dies ... prima fugit.’”⁽¹⁸⁾ 彼は常に過去しか味うことができないのである。そして又、この過ぎ行く過去を惜しむ Jim の感慨は、開拓の黄金時代が、急速に過去のものとなつて行くのを、心から惜しみながら見送らねばならなかつた Cather の詠歎の情と相通ずるものがある。開拓が進むにつれて、その最もよきものが、次第に失われて行くのを予知しての歎であつた。*Ántonia* の成功の道の直ぐ背後に、頹廢の徴を臨みみる気がしていたのであつた。My *Ántonia* は、開拓の英雄に対する讃歌であると同時に、やがては崩れ行く良きものに対する悲歌の前奏曲でもあつたのである。

以上のように、*Ántonia* との繋りにおいて、Jim Burden の持つ性格を検討してみると、彼は唯単に、視点の人物として取上げられたばかりでなく、Cather が、その多くの作品の中で検討しようとした各分野に亘る多くのテーマを内包するものとして、周到に配置されたものであることがわかる。従つて、My *Ántonia* における Jim Burden は、作者の綿密な用意の下に語られた草原物語における創作態度と、そこに含まれる諸問題を理解するために、むしろ主役よりも大きな意味を持つものとして吟味されねばならないのである。

- | | | |
|-------|--|-------|
| 註 (1) | W. Cather : On Writing—My First Novels | p. 91 |
| (2) | W. Cather : O Pioneers | p. 3 |
| (3) | W. Cather : My <i>Ántonia</i> | p. 13 |
| (4) | Ibid | p. 16 |

- (5) Ibid p.223
- (6) Ibid p.221
- (7) T. K. Whipple : Spokesman Willa Cather
- (8) H. Janies : The Art of the Novel
- (9) E. K. Brown : Willa Cather p.200
- (10) W. Cather : op. cit. p.208
- (11) Ibid p.150
- (12) T. Hoffman : The Modern Novel in America p. 57
- (13) W. Cather : op. cit. p.237
- (14) Ibid p.133
- (15) Ibia p.131
- (16) E. K. Brown : op. cit. p.205
- (17) W. Cather : op. cit. p.240
- (18) Ibid p.175